

ルーツが札幌農学校にあった。札幌農学校的思考が、日本がとるべきであった道、そして、現在と未来において、誇り高き国とその国民としてとるべき王道を示してくれているのではなかろうか。

《藤田正一氏のプロフィール》

第54代北海道大学応援団長、元北海道大学副学長、平成遠友夜学校校長

専門：環境毒性学（環境汚染物質が生物の体に及ぼす影響に関する研究）

専門以外の研究：札幌農学校の教育精神の歴史と現代的意義について研究

（クラーク関連著書）

「北海道大学に通底する精神と教育思想の歴史」（北大総合博物館）

「北海道大学の学問の系譜—北大学派の学風—」（北大総合博物館）

「日本のオールターナティブークラーク博士が種を蒔き北大の前身札幌農学校で生まれた清き精神—」（銀の鈴社）

ドキュメンタリードラマ「清き国ぞと憧れぬ」脚本共同執筆（HBC）

「新渡戸稲造夫妻が残した美しい高貴な遺産 札幌遠友夜学校」（自費出版）

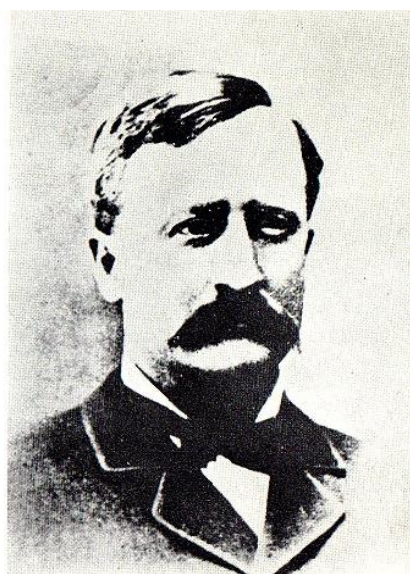
## コラム「クラークとエドウィン・ダン」

松尾 誠之(本会理事)

クラークが札幌農学校の教頭時代には、開拓使に雇用されていたエドウィン・ダンも札幌で真駒内種畜場の建設に取りかかっていました。

クラークより3年早い明治6

(1873)年にケプロンの要請で乳牛とめん羊を引き連れて来日したダンは、東京官園で生徒を指導していましたが、本道農業開発には酪農畜産の導入が有効と考え、七重・札幌官園を視察した後に明治9年に札幌官園に転勤して来ました。



エドウィン・ダンの肖像

同年来日したクラークは7月に品川から函館を経由して小樽に船で到着、馬で札幌に向かいます。8月1日には黒田清隆開拓使長官主催のクラーク着任祝の夕食会に札幌にいたダンも招かれています。これは札幌官園の大部分が同年札幌農学校に移管されたことによることも関係していると思われます。

その後も開拓使主催の年末の晩餐会に同席するなどクラークとダンは交流があった模様で、クラークは正月の挨拶に調所農学校長やダンのところを訪ねています。

ダンは回想録の中でクラークについて、「彼は有能で良き指導者でありオルガナイザーであった」と述べています。加えて全国の学校から注意深く選ばれた学生たちは、知的にも道徳的にも非常に程度が高かったとも言い「札幌農学校は教育機関として最初から成功であった」と回想しています。

現在、南区真駒内にあるエドウィン・ダン記念館は明治13年に真駒内牧牛場の事務所として建てられたもので北海道の酪農畜産のスタートアップの建築物として文化庁登録有形文化財並びに経済産業省の近代化産業遺産に認定されています。



写真：エドウィン・ダン記念館（札幌市南区真駒内泉町1丁目6）